日本ちの祭

四

詞を名どを四と

[V.7]

PL788
.4
.G4
1654
vol.7
copy 1
Asian
Japan
cage

2004551302

源氏十七歳の十月より四年の十月までを

朱雀院の明幸ハ神無月の十日あまりなり。よの
つねなりしず。おもしろかるべきことびのことなりけれバ
此かるごく抱えものもあるべきことなりしがり給ふ。
も荻つゞのこゝまはざらんをのぐおぼさられたゞ。
試示を此前にてきさせまふ。源氏の中将ハ青海波
をぞまひ給けるかるてまは大とのゝ頭中将かる
ちよういへまことなるを立なるべてとし。常のかる
くらの深山木なりへがるの日かげさやかまさしと
かまがくの声まさり。ものゝおもしろき程まおるゞ
舞のあしづゝおもくちよまこしぬさ夜なり。詠など
し給へるハ是や佛の此迦陵嚬伽のこゑなりんと

きこゆ。おもしろく哀なるよ。みなど波おとし給。か
んざちめみてこちもこれなきなめ。詠んでて袖う
ちなをしなへるよ。まちとりこるがくのまぎれ
そしこきよ。源の色あひまさりて。つねよりも
ひかるとこそ給。春宮の女御。弘徽殿と
てもこゝなるべおぼして。神ながそらまめでつ
べきかこちかなうこそゆくしとのまふを。まかき
女房などは心うしとみくとゞめかり。藤つぼハ。おほ
けるきこころなるましかバ。ましてめでこくこそ
ましとおぼすよ。夢のこちなんしまひける。宮を
やがてれとれぬ姫かり。九門司ふの志がくと青海波り

ことこれつきぬ。いかゞこゝのひはるとこそしかん
ぞ。あいなう(姦か)はいらへこそしまくて。ことは給つと
ぞりこそし給。(門司)りなてもぞしうもあらずこそこ
えつれ。まひのさ夜てづかひなん。家(いへ)のこそこしくな
ん。これよりは名(な)をえしるまひのおのこどもくげは
いとかしこなれど。こゝしうしなまめつゝすぢを
えなんこそぬ。心ミの日りくはくしつれば。もみぢ
のかげやさうぐしくとせへど。こせしそまつらん
の心まてよういきさせつゝなどこそし給。つとめて
中(源)将の君。いかは(文司)はしらんじけん。よりはしらぬこゝり
ごろちなまぐらこそ

抽(添)せしゆゑ立(たち)まゝべくもあらぬ男の袖(そで)うらかり
し心をうきや何かかしことあるけ(地)返(へり)めもいやなり
しけさ夜かくちゝまゝひ志のぐれずやいりけん
かゝ(なつか)人の袖ふることはとをかれど立(たち)ねまつ
かて哀(あはれ)とはこゝさ大かくまとはるをかさ(添ん)りなう
めづらしうかやうのかさへたどくしかず人
のこゝどまでおもほしやれるけさされこと葉(ぞ)の
かねてもとほゝ忍まれて指(ぢ)程(まぢ)(地)のやうりひろ
げてこゝねゝへり行(ぎやう)幸(ぐう)まはこゝこちなどよゝ
殆(のこ)る人なくつかうまつりゝへり去(とう)宮(ぐう)もおりします
れいのがくのふねどもこぎめぐりて、もろこし(唐ハ左)二つ(する繁ハ右)

とけくしたる。舞ともぐさおほかりがくのこゝろ。
これ者世をひぐかす。日とひの源氏のれゆふかげ。ゆ
ゆしうおぼされて。れぞ程など取くまをさせ給
をごとくりとあくれがりこそゆるに。甚家の女れ
れ。あるがちなりとまくこそこそしまふ。かいしろ
など。殿上人地下も心ことなりと。世人にしられる。
いうそくのかぎりとくのへさせまへり。宰相ふたり。
左衛門督。右衛門督。ひぐり左のがくのことをこれ
ふ。まひの師どもなどよりなべてなるぬをうり
けくをのくこまりぬてなんなるひけるこゝろ
紅葉のかげに四十人のかいしろいひしらず吹きて

ゝる柏の竜どもはあひゝる松風まことのこゝやま
をろしとさゝてゝ吹まよひ多くはちりゝ水
のえのなりより青海波のゝやき出ゝるさ雨い
とおそろしきまでこゝゆゝぎしの紅葉いて
うちりすぎてゝかのほひはけをされゝる
こゝらすれば おまへなりこゝくをおりて左大将
さしゝへ申ふ

日(地)くれかゝるほどは氣色(けしき)だゝりうち志ぐれて
雲(そら)のかしこきへこしつまがれなるはさるいこじ
きすがるはこきくの多くうけろひえなるめをか
ざして。かふはまるなるさてをつくしたる。入あや
の程(かど)そゞろざむく。此世のことも覚(おが)らず。抱こし
なまじきしも人などのこのもと岩(いえ)がくれ。山の手
の葉(え)はうけれたるさへすゝしものゝ心志るはなるべ
おとしかり。菊香殿(せうこきやうでん)のれたちの田(添ノ牙之)のこゝまぶわらは
まて。秋風(しうふうらく)まひまへるなんさしつぎれ見抱なり
けるこれらはおもしろされつきまそれば。こしく
りめもうけらず。かへりうるもことざましこや

何りけん。それ東源氏の中将、正三位（ぎやうざんゐ）にまふ。凱中（とうの）将正（しやう）
下（げ）のくらいにまふ。かんざらめくらいこれさうなぎき
うきりのしるうひ志給もらの（源）えまひかれたまへり
なれば人のめをもおどろかし心をもしるこゝろを給
背（むき）の世ゆしげなり。家（なつか）はそれしろまゝで給ぬれば
いのひまもやとうかゞひありき給をことまて。
おぼ（えたち）いとのまはさはがれまふいとゞかれ（紫）まゝ
ねどり給てしを二条院（てうのゐん）まは人むかへたまへりなし
人の罪（さいこ）をれば、いと（葵ん）心づきなしとおぼいたり。うち（源心）
うちのぬりさ海ハ志（葵ノ）り給こゞ。さもおぼさんことと
ちりなれど心うけうしう例（いい）の人のやうまうしこの

給はぐ我(源ノ)もうしなくうちかたりてなぐさめきこえ
てん抱を思(葵ノ)しらずるのことりないまふ此心づきなきな
さ(源ノ)もあるまじきすきひごとも出くるぞうし人の此
ゆりさ海のるかまそれことのあるぬとおぼゆる
さずもなし人よりさきなこそめてしうば
あくれまやむごとなきうるはせひ罕(きこ)ゆり心をもまり
おくぬほどこそあらぬんづぬまたおぼしなをされ
なんとおぼしくうがくしうしぬ此(こ)うろの程も
とのづらとこのまるうるはことなりそり おさ(そより漢ノ字)れき
人はこけいまふまるまいとよき心ざ海うちつり
てなる心まるくむつれまどりしきてし給 志(源ハ)ばし

上六

とのゝ内の人にもたれとしらせじとおぼして、猶
そなれたるさまにはしらひになくしてかれも
なけれいりおりしてよろづのはしたなしへ
さてしまて、ほんかきてなすらせなどしつゝ
ほかなりけれむすめはすゝへまへらんやうにぞ
おぼしたるよん所けいしなどをくじめどとるまゝ
ちて心もとなくぞつゝうまつらせ給ふれこゝにより
ほかの人はおぼつるくのゝしひさしたりかのちゝ
こやしもえしりさしたし給はざりかり娘君は猶とさ
どきさひさしたしかと給おまぎをしひさしたし給
おりおほうり君のおはすうほどはまうざらりしまゝ

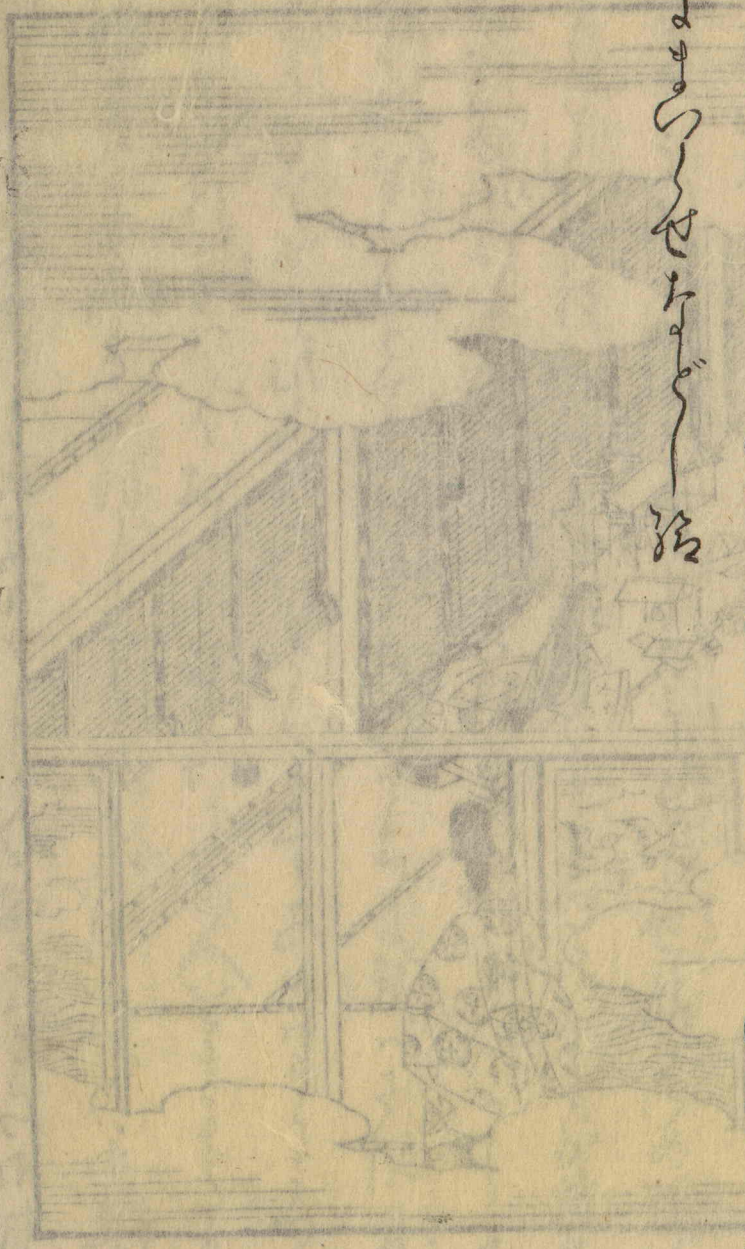
よりなどはときぐこそさまりあへごくりしこの
はいと海なくて、ふるれはいでおふと、しきひ、きそし
給ひりなどあるをいとらうたくせひきそしあへり。
二三日内(内裏)まさふらひ大(左大臣)とのまもはすりおりとも。
いといたくくしなどしあへば心(源)ぐるしうて無(なく)なき
子もたらんこそ地ちて、ゆりこさもしげ心なく覚(おぼ)し給。
僧都(そうづ)はかくなんとさてあておやしきあかうれし
となんおぼしける。坡(うれ)は法(かうじ)変(紫ノくうぐの近者)などしたまふまも。
いかめしうとふらひきそしあへり。我(おぢ)つぶのまうで
たまへる三條(さう)のこやは、はゆりさ海もゆりしうて
まゐりあへれば、命婦(ミヤウブ)、中納言(ちうなごん)の君、中務(なかづき)などやう

の人ぐ・さいめんしたりげざやうまもてなし給ふれ、
とやすらぎおもへど・しげめて・たゞるの御抽がたり
こゝろ給行る・兵アの実まつりまへりこれ君に
ちすとゝさてまてさいめんしまへりいとよし河ゐき後
していろめしうなりまびまへるを・女にてこんも
おかしからぬべく・人志れぞこゝろてまつり給はも・
うるぐむつましうおぼしまてこゝまやかに御もれ
がたりなどこゝろしまふ・実もこれ御さ後のつねより
とるなけかしうしまちとけまへるを・いとめで
たしとこゝろてまつり給て・むこうなどハおぼしよ
らで・女にてこゝろやといろめきこゝろ御心にハおもほせ・

それぬれば（音ア）こすれ由（らち）に入りをうしやましくむかし
ハうへの（法門）のれもてなしまいとけぢかく人づてるしぞ
物ともきこしめひしをこよなううとこゝめへるも
つくおぼゆるぞわりなきや（法河）志ばくもさふし姫
べそれどことぞとも侍らぬほどハとのゞかしらをこ
こゝろ侍らぬさうべきことなどハ（おほせ）侶ことも侍らんこそ
うれしくなどすくくしうていぞ女ぬ命姫もこ
ぐらうきこゝんかゝるく（若つか）文の（ミ）れ（けしき）年女もありし
よりこゝいとぐうきつしまおぼしをきて心とけぬ
れをしきもとげかしういとおしかれだなよのこ
ゝしまるくて（すざやく）道（地）ぐらるの（ちきう）奥やとおぼしこゝ

なることゝかゝるつきをば。お納言ハおぼしぜ[illegible]
りしきゝ[illegible]れ。是もこゝ[illegible]のこれ[illegible]を
おぼして[illegible]をこなひにもいのりこさそしまひし。
仏の[illegible]しにやとおぼ[illegible]いとのいとやむ
ごとなくておはしこゝかしこあまるかくづらひ
給をぞまことにおどなびまゝんほどにハむつし
きこともやと[illegible]けるされどかくさりわさおもひ
まへるれおぼしのかどハいとこれもしげなりうし[illegible]
ぶくだらすハ二月こそハとてつごもりにハぬぶ[illegible]
おとまゝおやもなくておひいで給しかばまゝゆき
[illegible]にハあらで紅紫山ぶきれぢのかぎりをれるれこ

うちこゝかすどもきゝあへるさ海にいこしうはまめうしこゝ
しげなりおとこぞ（添十八戈）ハ朝拜（てうたい）にまいり給とてざしのぞき
あへり（添同）ふよりハおとなしく成（なり）あへりやとてうちゑ
あへるいとめでさう愛形（あいぎやう）つきあへり（紫）いつしかひねなを
しすへてそゝきねあへり三尺（じやく）のこげしひとよろひにゑ
れぞれしつゝひすへて又らいさ紀や其（ぞ）つくりあ何めて
なあへるを（そきり）あきまでおそひむろげあへり（紫同）ぞすや
らふとてぬきぶこれをこぼら侍まれバつくろひ
こべるぞとていと大変（ざいじ）とおぼいたり（添同）げまいと
こゝろなきさ人のしわざまも侍れいまつくろし
せこべるんかふハこといこしてぞすゝハ給（しまひ）てとて出



あふひしきいと所をきゝ代人ごとしまいでくこ
こそまつれば姫君(ひめぎこ)もさらいでくこゝそまつり給
てひゐなれ中れ源氏のきこつくろひこそ御
ままつらせなどし給

ことしごとにすこしおとなびさせまへどをり
あまりぬるへはひねなあそびはいとそんるものを
かくれおとこなどまうけてまつりまてはあなが
べかしうしめやうまてこそこそ(そまつ)なしせ給ためれぐ
しまいる程をごとにもれうくをさせ給などお納言
ところ(こ)れあそびまのこ心いれまへれば・かげかしと
ぬさせ(そまつ)なとんとていへば(紫)ころのうちに我(れ)はさは男(おとこ)
まうけてがり・此人ごのおとことてあるはこまくて
こそ何れ・乳(れ)はうくおしげにわうきへをもとり
けるかなと今(いま)ぞおぼしたりけるさ(地)はいへど・れ年(とし)
のうどそふしたるしなりしうくおさるきれけ

おもひのどかなれてあかれば、とのゝうちの人〴〵
も、あやしとおもひけれど、いとゞうちよげりぬれ
そひずなんとはおもしがりけり。内より大殿は
あまでかへり御れいのうちとけしうよそほしきれさ
まいて心ぐるしきされ気色をあるくるしれば、へ
しよりずなすしのづさておもひあなれ心えしだ、
いろまうれしうんなすどこそしのへど、かざと人
すへてうづる給とてまゐしのりは、やむごと
なく覚しさごめのろこまよそこと、心のいほ
れていとゞらくげうしくおぼさるべし、お
おそろしめやうまそなしてぞれるけり

もひまはえしも心づかうぞ。ぬいらへなどうち罵(さと)
のへるはなす後人よりはいとことなり。よとせげうり。
これかこゝにおもしすれば。うちすぐしもげうしげり。
さりまとくのほりてこゝ給。なすまごとかは。これ人乃
あかぬ所(ところ)は抱しまふ。我(ヨガ)心のあまりそしらぬまさ
ひまうくうしこられてまつるぞかしとおぼし
しらる。おなじ大臣(ぎじん)とこそゆかまも。おぼしやむごと
なくおはすかがこやぞしまひ(菱)とりいけきかしづ
こそ給。ぬ心をぞりいとこよなくて。すこしもをろか
なりをばめざ後しとしひこそしまへる後。おとこ(源)ぞ
もなどかいとさしもとなしはいまふ。ぬこころのへ

ぞてどもなるべし。おとぐもかくこれもしげるさ
れ心をつくしとしひきてし給なぐらえてまつり
ものときはうしゝもわきれてうしつきいとなみ
きてしものふほとめて出給ところまさしのぞきまて
れさうぞくしものつまゐたきれおびてげうもう
きてわたりまてれぞれれうしろひきつくろひな
どれくりをとゝぬどりましものふいとあれなり。
これはなひえんなどいふことも侍なるほ。さやう乃
ありまてなどきてしのへどそれはまされなも
侍り。これはこゞめなれぬさ海なればなんとてしおて
さしせなりのふげよよろづまりしづきこそくゝん

さしせまりのあげなきあらはまゐ
なまりぬはいけるひありさ侍てまうさん人
とやさしいわてさんはまゐすまじあしくとこ
くまのさんざしまとてもおまろところまあり
さぬくず。内蔵一院だりざて猶つぎの三條乃
こやまぞてまいりさまへるぞと内にまゐることあまこ
ぬくおわびぬまくはゆしきさまでなりまゐり侍れ
ほりさ侍るかし、くめで候ゆるは。家には其丁のひ
まいりぬのこくまのなまつけてもおぼゆこと
あげりなり。これはことのあるすまるまし心
まとみかさるはびあはいさりともとこそやへくは納言内侍
まぼさるは心まうけどもあるまじれなくてやらめ。

此ものけまやと世人もきゝしさるぐをこゝやいと
まびしうこれことよりも外のいろごろまなりぬ
べきことくおぼしなげくまれこちもいとくるしく
てなやゝ給。中将のきゝはいとぐせひあるをて。こゝ
ほうなどわざとはなくて。而しまをきせ給。世中の
さゞめなきまつけてもかくくれくてやゝこゝるん
とどりあけめてなげき給ま。二月の十日あまりの
行ま。おとこみこ生れ給ぬれば。ゑ御なく内まも
家人もよろしび罪給。命ちなぐもとおもほすは
心うれど。弘厳殿などのうけさしげまのまふ也
きくしとあるしなしくきてなし給いましかば人のこと

れまやと見えしつゝりてなんやうくしてしづさ
ちやいまひけるうへのいはしうとゆうしげり
おぼしめしたるとうぎりなりしかれ人志れぬ此心
よもいうじう心もとるくて人まゝまつりまて うへ
のおぼしかるがり冥させ給をまゐしこそまつり
て羹し給らんとしてしまへどむつしげるる程
なれいとてこをなりまゝぬもことゝりなりさるハ
いとあさまましうめづらかなりまでうつしさり給
へるさ雨こがふべくもなしず宮の此うろのをあく
いとくるしう人のこゝてまつるもあやしうりつる
程のあやまちをまさに人のせひさがめじやさしぬ

ちゝるさきとさずまゝずすみをまゝむろのなゝにいかゞ
御のつみをまゐりいふべきことよりも、おぼしつゞくるに、
身のおそれと心うきなる今[源]の御のまゝまさるなにひ
おそれいでみえしを見せつくしのへだてなきのうひ
なるべきにもあらず。わか[冷泉]君の御ことをさはりなく
おぼつかなかりしきこえの人は、[今]おほやけぐらうしもなれがら
よの給をすゝん。今をのぞいてつかうまつりて世給
てんとうこゝしきりにさとし、よろしからぬ世のゝめぐ
なすぎうちは、いにしへのことをきこしめせば、[源]かの君もえの絵
ぞでいかゞあらん世をまたへづておほやけごとしさせん
まで。おほいのかたの御ぞで心ぐるしき

語 いろ海はむかしむかへぐる契（ちぎり）ありて出世するなく
ふ中氏へだててぞ。（源詞）かるこころこころくげかれと
のかの ふ。命婦も（苔つき）安の日本し ころれかるきさ国ちぐ
せうしやうはえりしこうなうはしたちきこえず
（命婦）さてはせうしめてらはなげくんさや世の
人のまのがふてふやこ。（命婦詞）あされは心ゆかぬひなさきれしく
どもゝかすと。（奏の）遊びてきこえしけりが。（源）くのこゑいひやう前
なくてくへりのあ抱りしが人の中氏ひもよらずく
しらさをかりなきこゑの結の色あかやさて命婦
とも昔（むかし）おぼつかりしやうらのまうらとけむすび結
なげく人めぐりまじくぐなかれてなかしの手地

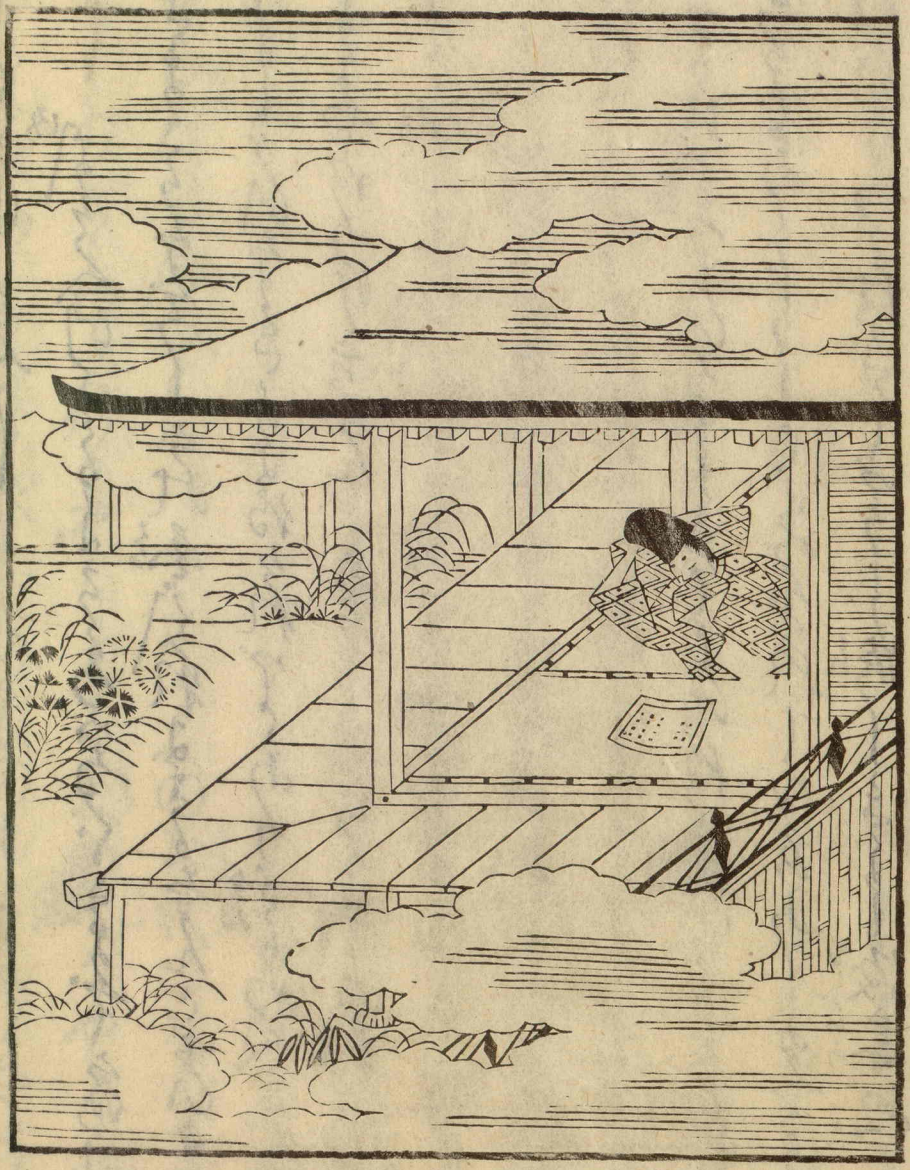
うゝ心づきれしとおぼして時もあるべき後いとゝ
びしくせひの外なる心ちしてべし。宵に内へ(あるべ)あり
あふほどよりハおほしさまかすけるひてやうく
おきゐへりなどし給。あさまのしきまでまゐぎれ前(どころ)
なきれかなつきを荒(あが)しかしぬことのしなれば又(はしたい)
るしびなきどちハげ(源氏と家文と)まゐるまこそはとお
もほしうりいそしうおもほしうしづことうぎり
なし。源氏の君をうぎりなき地に荒しめしるがら。
世の人のゆるしきこゆまじうりしまうりてげう
まもえすへなしず(ぬ)ぬしをあらずくちかしうさて
人まてうこじけるきれ(あり)有(さま)信うこちまわびまておい

すりを所らんぜうまゝに心ぐるしく思しめすを
かりやむごとなきかたらにおなじひかりにてさ
し出あへれば、さずるさまとおもほしうしづくに
家(おいが)いかるまつけてもむかしのひまるくやすらず北
をおもほして、例(れい)の中(添)将の君こゝろにて所にそびろど
志給に、いづこ(あまた)さ出してまつらせまて、みそ(所門詞)たち何まる
あれどそこをのゝちまんかくり程どより明(あけ)雲(くれ)しさ
れば出わるさるくまやあらん、いとよくこそおぼし
これ、ちいさき程にゝれかくのゝあるわざまやなり
むとて、いゝじくうけらしとせひきこゝさせ給
へり、中(添)将の君おもての気かくり心ちしておそろし

うまくじけるくまうれしくも哀ともかくこそぐう
いろゝに心ちまどひて涙おちめくべし。抑がたりるどうて
うちゐへをへるかげもゆくしきりうしこさま。
源 我身なすびしこれまゝこんハかじうひうきりしう
おぼしはぞはるかぢちるなや。窓ゐわりたりくさりう
いきゝうぬ。おもかまなれてぞおりしける。源 中ねハ申し
あまり心ちのうきさゞろやうちまればまうでつひめ我身
にかゝりはよしおてむゐのやるくろうきさだ猶さそびて
葵 ておぼいよのへとおぼそおまへのお執のたつみと
るくあまこぞれろ中まどゝ夜のさるるやくわ嘆
然るを松かしせおそ今宵のまんのゆとまゝがうきあのま

ことおほかるべし

涙 おそへ川こゝろまゝろはるぐさまで寝け
さまさるなぞしこれ菓(えな)くれまさりなんとせひ申へ
しもがひなまさよ待れげとありさりぬべきひ
まゝやゆりけんだらんどさせてとぐちり汗(ぞう)に菓(えな)びし
まと寝(さく)ゆるを我(あつが)心にも抱けと衣(あれ)に見しまゝ行まて
袖(あつが)めるゝ涙のゆりとせふにも抱(なと)うとまれぬ
やまとなぞしてとゞりほのゝまゝさしこゝやう
なる代(命婦)よろしびろがしてまゐれる例(涙)のことゝなれハ
しるしあしじうしとよづなれてゐがめしまへるま
むもうちさはざていうじう嫉(えれ)しきにも涙落(なきぶかり)ぬ



ほつぐぐとふしたるよも。やるたなきこゝろしれは。
例(れい)のるぐさめまは。ましのこいまぞわたり給。志どけ
なくうちふくぶゝまへるびんぐき。あぎれぬる
うりさすぐさまて。ふえをなけうしうふきを
さひつ。のぞきまへれば。女(紫)ぎ。ありつる菜(えな)の露(つゆ)は
ぬれたるこゝろしてぞひかしまへるさ海。うれく
しうらうたげなり。あいぎやうこぼるくやうまて。
おりしるぐ。とくもわたり給ちぬ。な海うしあしかり
それば例(れい)なるぞそむきまへるなるべし。そ(源)しのこ
ゝつい否(ぬ)て。こちやとのまへどおどろ(紫)ず。入ぬるいそ
のとくらぎさひて。口おほひし給へるさ海。いとゞ

うざれてうけくしあかまくうつことくらなれ給
まうりかみかめまあくはまさるまさことよとて人
めして此琴とりよとてひかせなりまふさう乃
琴は中此ほそをのうへがうきとて所をけ積とて
平調をしくづして志しべ給かきあくせぐらりひ
きて さしやりまへれば元忍じもとてぐいとうけく
しうひきまふらはさ紀此程まさしやりてゆし給
此てつきいとうけくしそれぞらうしとおぼして
笛吹なりしけをしへ給いとさとくて うつうき
調子どもをうぐ一ちうりまなしひとりしまふ大方
らうくぞうなりしきれこころぞへを思しし事

らりくだりかゝしさ…
をかふとおぼそほそろくきりといふ袖にぞおいりゝ
なれどおもしろうふきすましたるまゝにあはれ
せまさかりなれど楠子(ちやうし)しらずよぞめきてうちおほと
なかうまいりて思ひどもなどかれんずるはいぞてのすべ
しとゆりつれば人ぐちはづかり宅(ここ)て海ふり待ね
いしきどいふは姫君例(れい)の心ほそくそゞろしのすくり
思ひもよらしてうけぶしておいきれば、とらうらく
てれどもしのいとめでうくこゝろれうりしうるさき
なそる和なるほどに惑しやあるとのくすまへば
なすつきなふ我もひとひらうそてまつるめたいと
ふるまうそてざれどおさゝすおなすほどにうちゐや

すくせひきてして、まげくねくせくうしむる人
の心やぶらじとせひて、むつしかれだ、しだし
かくもなりくぞ、おとるしくこれしては、ほか人もさ
らはいくまじ、人の恨(うら)をおりじなどおもふも、世は
なかうなりて、せふさ夜にこしなりん(そまつ)とおもふぞなど、
こ夜ぐとかくしひきてしまへだ、さすがにとがり
しくて、ともかくもいふへきてし給りぞ、やがて此
ひざまよりかくりて、ねいりまひぬれだ、いとこころ
ぐるしうて、こよひはいでぞ、ぬ(なり)ぬとのたまへば、これ
こちて、おものるどこるるにまいらせたり、娘(紫)君に
こしなり(そまつ)まひて、いてず、ぬぬときてしまへだ、なぐと

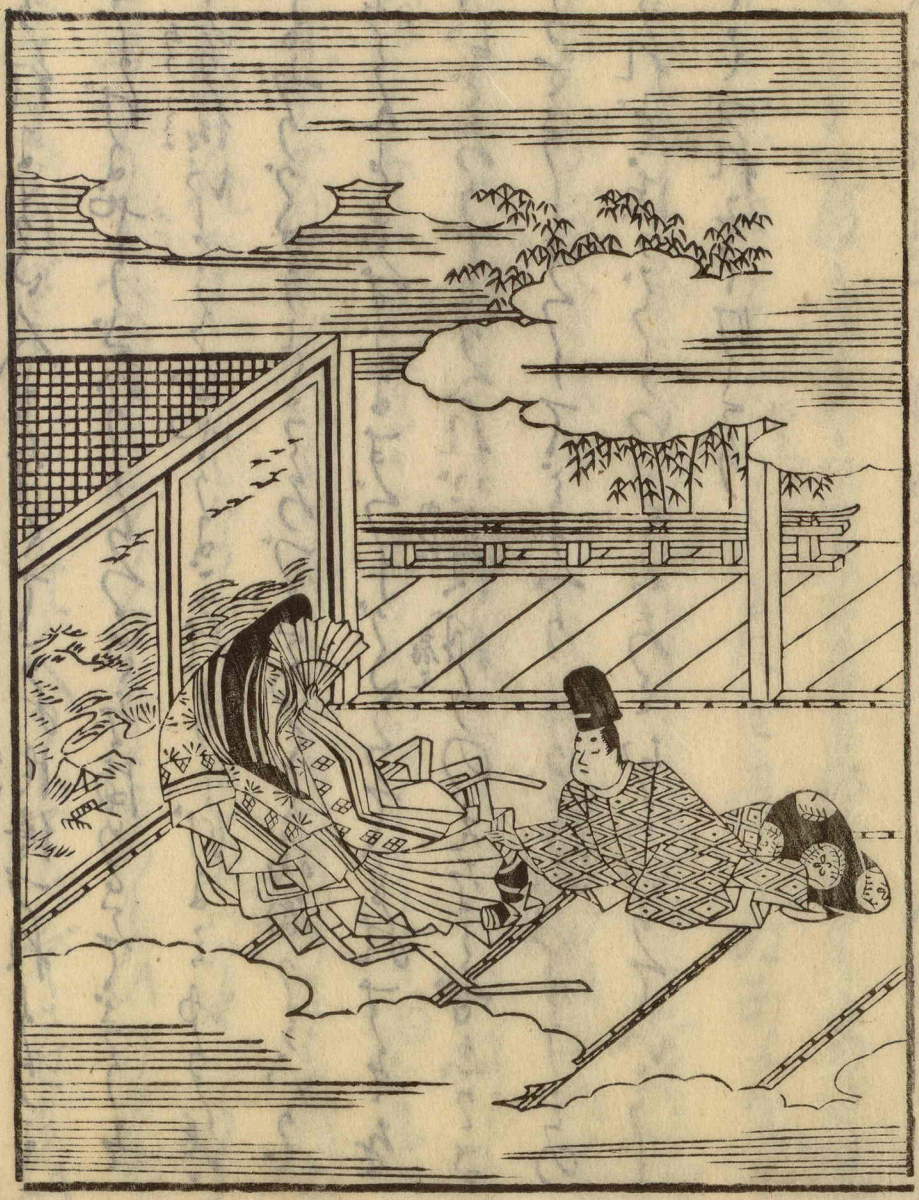
こておきまへり。もろともまれなどまいる。いと
もろなげますさひて。さらハねまひ口りしと。あやう
げまさふまへれバ。がろをこすてくれ。いろじき道
なりとも。まもむこさがらく。見る給。かやうにとぐめら
れまふおりくなどもおほうる。なれ。何からもり
きく人。おほいとのまきてしかれど。これるらん。いと
めざ。ほさことにもあらかれ。いまゝでそれ人とも
きこらず。さやうにまゐらしこそふれなどすらんハ。
あてやかに心につき人にはあらじ。内わらりなど
まて。ちうるくこ給けん人を。ものめしまて。人や
とぶめんとうつしのなるを。心なげにいたけなくて

さらゆるはなど。さふら婦人ぐもさらしあへり。(汎門)うち
まもりる人ありとさらしめして。いとおしく。(汎門詞)お
とぐの思ひなげかるなることもげに抱げなるり
し程をおほかくかく抱しらる心を。さばかり乃
ことらどらぬ程どまはあらじを。などかなさけ
なくはもてなするなど。の給はれど。(源)うしこ
ありしるさ夜にて。(汎)いろへもさらしおもはれど。(汎門)心
ゆかぬなめりといとおしくおぼしめす。(汎門詞)さるはすき
ずきしうさらしられて。(ねうぐう)此ゆる女房にまれ。又
しるしかるこの人ぐなどなべてるらずるどもこ
さらしざめるをいかるものゝ夜にかくれあ里

きてうく人にも恨(うらん)との給ひ。(地)ゑうどの
此年(とし)稱びさせまひぬれどうやうのうたいえすぐ
させ給ひず。采女(うねへ)蔵人(くらふど)などをもうちうちあるをば
ことにもてはやしおぼしめしたれば。よしあり
ゑやづかへ人おほかうころなり。(源)ちうるきことをも
いひふれ給ひにはもて(女どもうす)はるくことも何りがうちさま。
めなるくにやあらんげにぞあやしうすいたまい
ざめりとこころうにこそふれごとをこそうりな
どすりおりなれど。(源)なすさけなりしぬほどにうち
いへて。まことにはこゞれたまはぬを。(女ども)まめやかり
さうぐしとおひきゐる人もあり。さしいたう

老(おい)たる内侍(ないし)のもとけ。人もやんごとなく心ばをありて。
あてにおぼしたるくはなりなどしいたじうあぶ。見
いたる心ざ夜まで。そうなるまはをもらぬあるを。(源ん)う
うさぶすぐ。なまでなどさしもうぶるんといぶ
りしくおぼしまひ。それがうちふれごといひふれて。
心ゑまふに。(内侍ん)にげなくもおもはざりけり。(源ん)なさましと
おぼしなどしさすがまうるもおかしうて。拍なすぐ
のまてぞれど。人のもりきうんもふるめしきほど
なれば。つれなくもてなしまへるを。(内侍)女はいとつし
と思へり。(内侍)うへのれかづりぐしまさふしひけるを
もてまかれば。こうちきれ人めして。いでさせまひ

ぬる程にまゐる人もなくてこれ内侍(ないし)づねよりも
きよげにやうぶいりしらつきな夜めさてざうそ
く有様(ありさま)いとさかやかにこれましげにゆるしゆ
さ(添ん)もゆりがうとうろづきるくゝ給柄からいかゞ
せんとさすがにすぐしがたくて。もれすそを
引おどろかしまへれバ内侍(ばかり)はぼり(扇こ)のえなるぞ忍かさ
るをさしかくしてこゝへりしるまみいたうこの
べこれど夜かぢらいてくろゝおちいりていこじ
くもづれそてけしり



まつ(ほん)しかしぬ扇(あぎ)のさ海かるとゝ給ひてゆゑ
もゐへるまさしかへてゝゐへがおりさかみのう
けるぐらり気ゆるさまゝ才ぐらさもりのうるを
ぬりかくしたりかるつるまでいとさぐすぎ
これどよしなりしぞ我りのしるくさおいぬれ
ぐなしぐらさまさひしるをどとしまえておれ
うしての心ぐへやと忍まれるぐらもりこそ夜の
とゝゆめるとてなまくれとのゐふもまげなくんや
ゝけげんとくるしさ成(内侍)女いさも知もひしらず
(内侍)恵しこばたなれの弱(こま)まりかりんさりすぎ
しろ下(しまど)葉なりともといふさ海ことるう父めさしり

係 ぢくまけば人やとがめんいけとる 弱(こま)なまづく
めるまりのまがくれ・かづらりしきまとてしら給を・
内侍 ひゝへて・おぼうらもれをまそせひもぐらね・今(いま)さら
なる身のもぢまなんとてゐくさ海いといふじ・いま 源氏
こきてしん・せひなまぐらぞやとて・引(ひき)ちらて出ゐふ
を・内侍 ぞめてをよびて・かしぐらとうしゝうるを・内門 うへ
はこうちこさまてく・伏(こ)傍子(さうじ)のうちよりのぞうせ給
なり・よりかもしうしぬあまひれといとおかしう
おぼしめされて・内門 ずきぶ心なしとつねまもてゐやむ
ある・伏さはいへどすぐさじつまけるはとて・わらはせ
ゐへば・内侍(ないし)はな海まばゆかれどすくうしぬ人ゆへはぬれ

ぶぬをぶまきまほしうらぶひも何なれバよや。
いたうもあらぶひきてしさせず。人(地)ども。しひのかう
なることかれとあれかふめる後。頭(とうの)中ねきてつけて。
いたらぬくまなき心にてまぶしひよろぶりけるよと
しゆまづきをぬ好(このみ)ミ心もこまかしう奴(なり)になれバが
たらひつきなり。此(内侍ん)君(以中)も人よりハいとことなる後。
かれつれなき人(源)の所なぐさめまとおもひつれど。
みまかしきはうぎり何りけるをとや。うしてのこれ
こや。いたうしのぶれバ源氏の君ハえしり給ふぞ。
こ(内侍源と)つけきてしてハまづうしミ字(きこ)ゆりを。よ(源ん)くひの程
いとおしそれバなぐさめんとおぼをどかるらぬ地

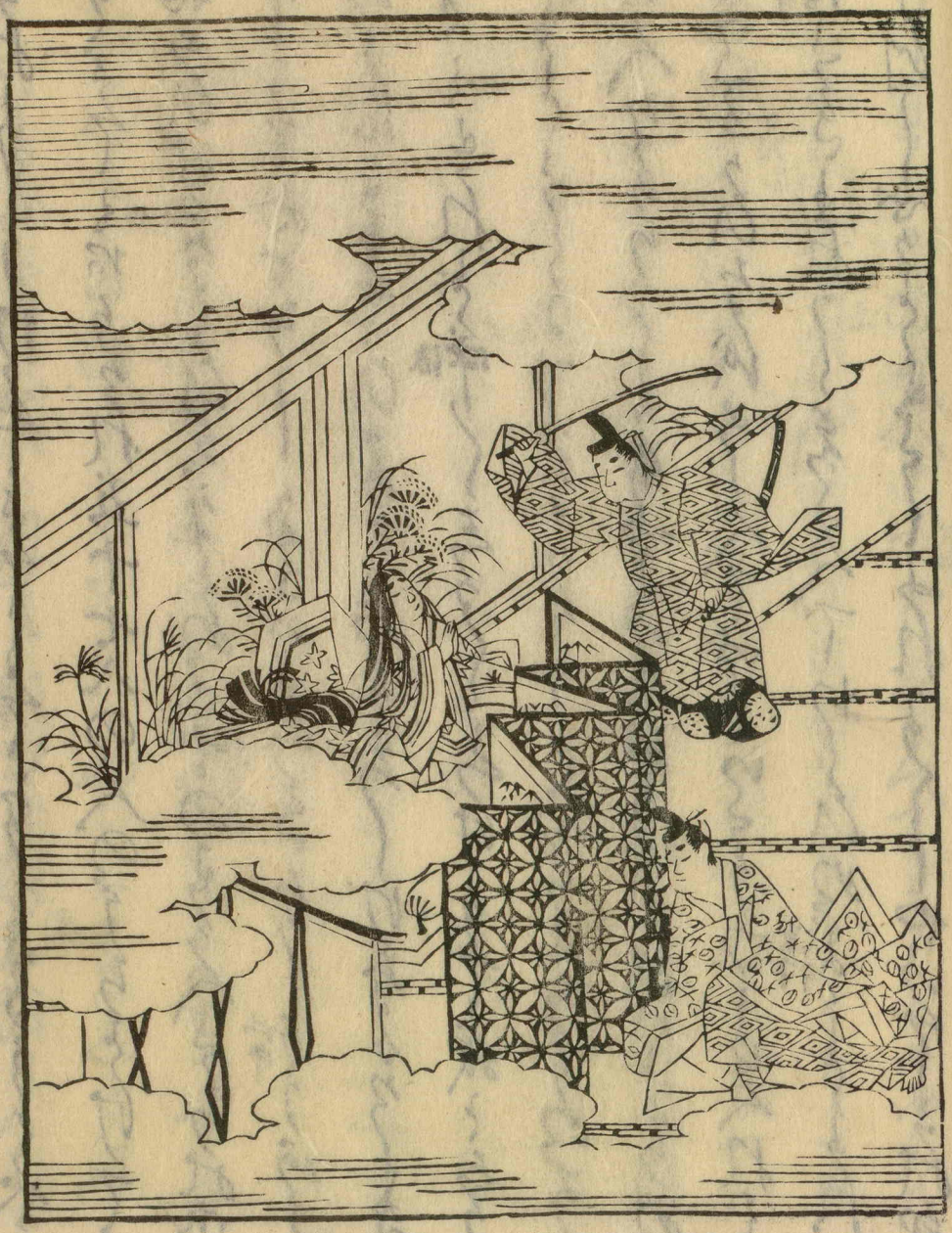
うさまいとひさしうなりまけるをゆふぐらしてゝ
おごり涼しき宵のまぎれに温明殿のわたりをさ
しずまりてさしまへば内侍びも代いとおかしう
ひきゐたり前などまてもおとこすのあそび
まじつとなどしてことまさる人なき上手なれ
ばもれくうちめしうえてけるありうらいとなれに
きこゆうつはくりに咲やしなましと聲いと
おかしうてうたふぞすこし心づきなきぐくしう
まかりけん昔の人もうくやおかしかりけんとみ
とまりてきてあふひきやえていといたくたもひ
えぐれたりけるひなり恵あげまやを思びやかに

うたひてよりねまへるにぞ内行しひらいて、さこまをと
うちそへたるも例れい源ん にしがひたるこちぞするや
立内行ぬるく人志もあらじあげまやにうたて
もうる面ぞくきうれどうちなげくを我源ん ひとり
しもこさてあふまじそれどうとましや行ぐすを
くまでもとあばゆ
人源づまはあかわづらりしあげまやのまやの
何まりもなれじとぞ志ふとてうちすぎなまれ
しそれどおまりたしたるくやと志ひかへして
人に志るがへばぞてうしやつとうるうたてふれごとな
どいひかりして是これもめづらしき心ちぞ志ふ頭とうの中ね

も。此君(係)のいろくまめごちをぐして。つねにもどさ
こまふが。ゐるこさ。つれなくて。うちくに。思(しの)びあふ
ゐるぐおほかめるを。いかでこゝろにもきんとのこ思
ひわるゝにこれをこゝろけるこゝろ。いせうれし。
かゝおりにすゝしをどしきこして。此(こ)ころまど
もしてごりぬやといもんと思ひて。こゝゆめきこゝ。風(地)
ひやくかにうちふきて。やくふけり。程(おど)にもてこゝ
まどころむにやとこゆる。宇多(いしき)なれば。やを(以中)とゝいりける
に。君(係)にとけて志も。給もぬころなれば。ふとこさ
つけて。此中将とは思ひよらずなを。志(まれが)難くすなる。
すりのかゝにてあらはんとおほせにに。おこれく

しき人にうくなげなきふるまひをしてこゝろけら
れんとはたげかしそれは（源詞）なかわづらひしいでなん
よべくもれふるまひはしりかりつゝんもれを心うく
せうし給けるよとてなをしづりをさりて屏風（びやうぶ）
のうしろまへなめ中ねなりしきはゐんぢて（ひき）
とて給へる屏風（びやうぶ）のもとまよりてごゝぐとこゝみ
よをておどろくしうさはがすよ内侍（ないし）はねびされど
いたくよしだこゝなすよびたる人のさ記ぐまうやう
まて心うごう寸なりくなりそれはなすしひていたじ
く心あはたしさまもこれ君（源）をいりましきて
ぬるまりとまびしさり。ふるぬくけ（源ノ舳と）とひ

うへたりこれ（係）と思られていでなげやとおぼせど思
どけなきすがたなてかうかりなどうちゆがめて
もしたんうしろでせふまいとおこなるべしと笑（おが）
しやすふ中将いうで我と思られきてしじと
思てもれもいたずせずいたじういかれる章（けしさ）女まも
てなしてこちを引（ひき）ぬけば女（門侍）あがきみくと
むこひてゑをするに得（以中）どくわしひぬべし



これましうわかやぎてもてなしこるうとべこ
そざてもなりかれ五十七八の人のうちとけて
抱きひけるなるひえなりぬ二十のほかへたちれば
中にて抱きぢし多るいとつきなし（以中）がうなる
ぬさ後にもてひがめておそろしげなるなしき
なこえされど（以中）くしるくこつけもて我とあり
てこしさしにするなりなりとおこなりぬ
の人なりとこのふにいとおりしかれがこちぬ
きこちかひなれ此しへていといこうつこのへれど
（以中）ねこきもれりしえこへでわしひぬ（諸詞）まことには
うけし心をとにこれまくしやいでこれな

なしきんとのおへどつとうしへてさしくはゆる
しきくしずさしげ（源）もろともまもしてとこ
中将の弟（なびき）をひきとしてぬがをおへばぬがじ（中）おく
まきまふをとくひきしろふ程まかうろびたほ
ろくとしてぬ中将
つむ（中）めるあやまりいでんひきたはしりく
ほうろぶる中のしろもまうへまとりきぐしろう
らんといふきこ
くれ（源）なるき抱としろく夜衣（なつごろも）きるをうすき
心とぞみる（地）といひかくしてうしやこたまきしどけ
なるきすがるまれなすれてこれ出まめ（源）君はいとくち

おしくこうけられぬることくおもひふしまへる
内侍はあさましうおぼしそれぞおちとまれる御
さしぬきおびなどつとめてこそまつれり
内侍ぞこ
根てもいふかひぞなきこちらされひきてかへ
まし波のおぼりにぞこもあらはまとはり源ん
さ海やとこ給もまくそれどかりなしとさへり志も
さすがにする
源
あらぶちし波に心をさはがれどよ物けん
破をいかぐうしこぬとのこなんなけるおびは中将
の成なり源がはなすぬしにしるまをいろふしとこん
給はそこ袖もなりなりあやしのことどもや

なりたちてこゝぞるく人はむべおこがましきことも
なほかんといとゞ此心おさめられ給中将との升
取(ごち)ゐりこれまづとぢつけさせ給へとてぞしけ
こそなさせ給ふ紙(源)いかてさりつゝんと心やまし
これおびなえざしまいらばとおぼせ(その)いろの
うこまいらこそ
中(源)将(こ)がうゞとやおふとあやうさまさるゝの
帯(おび)はさりてぞまこぞとてやはまふ立(たち)かへり
来(年)なりく引きられぬる帯(おび)なれバかくてこそ
ぬる中とかろこん。えのがれ給ひじとあり。目をけて
とのく夜(てんじき)上まいりのへりいと志げうまれどをき

さ海しておもすなる駅の君もいとなりしかれど
おほやけがとおほくそうしくぞ日にそゑいと
うるさしくすくよろなるをこゝろもりこゝに御く思
まる人まるまさしよりて抱がくしそこりぬしん
りしとて いとゆゑげなる志りめなりなどそてかさし
もあらん立るがこりへりけん人こそいとなしかれ
まことはうしや世中よといひあらせてどこの山
なるとかこゝるくちがこむさて手段のともまれが
ことのついでごとまいひむりふるくさくひなる代
いとゞ抱むつりしき人なとおぼし志雅るべし女
て和いとえんは指こりくる代まびしとおもひ

ありき給。中将はいまうとの君は罪(きこ)いでぞ。さぐ。
さるべきありのをとしぐさまをんとぞおもひけ。
やむごとなきはけしぐのみこしちぐさ。(門)人の
(源と)れもてるしのこよなきさまにぐらいしがりて。いと
ことなさりさきしまへるを。これ中将はさらなりし
そこれをさらしじとさらなきことにつけても。むひ
いどこをさらし給。(以中)武ひとりぞ。(菱)姫君のれひとつがら
なりけり。(源ハ)みかどのれ子といふぐらにこそなれ。我も
あるじ大臣(じ)とをさしまれど。れあぼしとなるが。かんこ
ぐらにて。文ちくらしづれしるは。何ぐらりをとる
べきなんとあぼしおもぬなるべし。人がらもあり

べきかぎりとくのひて何度もあしまほしくしたひ
てぞ申し給けるこれは中どものいどんこそ
あやしかりしがされどうるさくてなん七月まぞ
なつかは宮に立給すると
ゑさせ給ぬまゐりし源氏の君宰相になり給ぬ
みかどありねさせ給ちんの御心づかひちかう成家
は若宮を坊にとしひきてしさせ給ふ御うしろ志
給べきひとおもほゆ御くらゐ心ゆるしてしたちに
て源氏のおほやけごとしり給ひしぢなしねばぐ宮
とぞるうごきなきさまなるしをとさなりて御より
ことおほすなんなりける弘徽殿いとくれこころう
ごき給ことなりなりされど春宮の御世いとちかくなり

ぬれがうるがひなきれ位なり。おもほしのどめよと
ぞこそしさせまひけるげ地は去家のれ母まて其余序
まなりまへる女れを垂てまつりてハ引こしこそ
まつりまひがうきことなりうしと例のやまうしば。
世人もこそしかりまいり給兵のれとまは宰相の君
もつうまつりまふおなじこそれとこそゆる中
はもこささいぐらのみこ。むのひかりうやこそこ
ぐひなきれおほしはさへもれしこまへぐ人も
いとしとはせひかしづきこそしたり。まして
なきれ心はれこしのうちもせひやれていとく
とよびなきぶちし給はそぐろうしこまでなん

つきもをぬ心のやうなくてかれ雲ゐに人
をうらまつけてもとのこひとりごとれいしもれい
とあれなりみこそおよすけまふ月日にしたる
がひていとうてまつりわきがこげなるを安いと
くるしとおぼをど思ひよる人なきなりかしげに
いかさ海にいくりへて月をさらぬれありさ海にうま
いでもれし給へるし月日のひかりの室にうま
ひとるやうなぞよれ人もおもへる

69038
6A878